月刊
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成18年12月1日発行　第30巻第12号通巻第351号

みんぱく

30巻記念号

国立民族学博物館
2006
12

エッセイ

世界へ 世界から

法王の舌禍事件

山折哲雄

やまおり　てつお／1931年生まれ。岩手県出身。東北大学文学部卒業。東北大学文学部助教授、国際日本文化研究センター教授、所長を経て、同センター名誉教授。専門は宗教学。主著に『近代日本人の宗教意識』『死の民俗学』『愛欲の精神史』『「歌」の精神史』『テクノボーになりたい―私の宮沢賢治』『ブッダは、なぜ子を捨てたか』などがある。

今年の九月、ローマ法王ベネディクト一六世による舌禍事件の反響が世界をかけめぐった。

法王が母国ドイツを訪問中、レーゲンスブルク大学で神学を講義したときだった。一四世紀の東ローマ皇帝マヌエル二世のことばを引用しておこなった発言で、火がついた。「ムハンマドがあらたにもたらしたものは、剣によって自らの説くところを広めよと命ずる邪悪と残酷だけ」と言ったのだからたまらない。世界のイスラム諸国から強い抗議の声があがった。あとになってからいくら弁明しても、ときすでに遅し、後の祭りだった。

この法王発言はもしかすると、今後さらに「反米欧」「反キリスト教」の動きに拍車をかけることになるのではないだろうか。いかなる弁明、釈明をおこなったとしても、法王という立場を考えた場合、それが不用意な発言であったことは否定することができない。

じつはわたしは、たまたま昨年の一二月中旬、パリに行く機会があった。ユネスコ本部でおこなわれたバチカン主催の「対話シンポジウム」に出席するためである。知られているように昨年四月、バチカンでは法王が替わった。ポーランド出身のヨハネ・パウロ二世が亡くなり、そのあとをドイツ出身のラッツィンガー枢機卿が継ぎ、さきのベネディクト一六世が誕生したからだ。

思い返すと、一九六〇年代、バチカンは第二公会議を開いて宗教間対話を推進する大きな動きを見せた。そのときの法王がパウロ六世で、このとき発布された法王の回勅が今回の会議に先立って参加者のもとに送られていた。そのためであろう、シンポジウムのテーマも「対話の可能性―パウロ六世と文化の多様性」となっていた。そのうえ、この「文化の多様性」は、ユネスコがこれからとり組もうとする重要な政策課題でもあったのである。

このシンポジウムへの参加者は哲学、神学、歴史学の各分野の専門家、それにバチカンから派遣されたユネスコ大使と枢機卿が加わり、わたしを含め総勢八名で構成されていた。ところが不思議なことに、そこにはイスラム側からの参加者がいなかったのである。あるいは主催者の側に、これまでのキリスト教対イスラムという枠組みをこえようとする意図があったのかもしれない。

今度のこととそれが関連があるのかどうか、法王による舌禍事件がこれからどのような推移をたどるのか、しばらくは見守らなければなるまいと思っている。

月刊みんなぱく

目次

DECEMBER 2006
月刊みんなぱく 12

01 エッセイ　世界へ世界から
法王の舌禍事件
山折 哲雄

02 特集 30巻記念
『月刊みんなぱく』発行30巻記念座談会
『月刊みんなぱく』の過去・現在、そして未来
石毛 直道
野村 雅一
池谷 和信

09 『月刊みんなぱく』歴代編集長からのメッセージ
小山 修三
八杉 佳穂
杉田 繁治
中牧 弘允
秋道 智彌
小長谷 有紀
栗本 英世
長野 泰彦
印東 道子
小川 了

14 みんぱくインフォメーション

16 万国津々浦々
スーツケースとアマゾンの旅
齋藤 晃

17 表紙モノ語り
350枚の表紙
池谷 和信

18 外国人として生きる
心で奏でるビーナス
―ウェイウェイ・ウー（巫 謝慧）―
陳 天璽

20 生きもの博物誌
亜熱帯林と草果
篠原 徹

22 フィールドで考える
掘り出された
ニカラグア内戦の傷
長谷川 悦夫

24 企画展　世界のおくりもの
こどもとおとなをつなぐもの
次号予告・編集後記

巻末 『月刊みんなぱく』30巻総索引

※表紙解説は17ページ

『月刊みんぱく』発行三〇巻記念座談会

『月刊みんぱく』の過去・現在、そして未来

一九七七年一〇月に第一号が産声をあげ、この一二月でちょうど三〇巻を達成した。節目にあたり、歴代編集長に本誌の存在意義や編集のエピソード、継続のための苦労などについて語ってもらった。過去を顧みると同時に、現在を検証することで、『月刊みんぱく』の未来への展望を探ってみたい。

池谷　まずは今から三〇年前、どういう形でこの雑誌は生まれたのでしょうか。

石毛　民博がオープンするころはものすごく忙しく、今より教官の数はずっと少ないし、全員が展示の作業にとりかかっていました。そこへもってきて開館にあわせて図録を出さなければならない。わたしはその図録の編集長格でかかりきり。そのほかに千里文化財団の「友の会」が組織され、『季刊民族学』や『民博通信』も出すと。そこへ梅棹忠夫館長が『月刊みんぱく』というアイデアを出したわけです。当時、編集の経験がある人ってほとんどいなかったんです。わたしは『季刊人類学』の編集長みたいなことをやったり、本も何冊か編集したりしていたから、広報のこともわかるだろうと。それで、任されたわけです。

そしてこれを長続きさせるにはどうしたらいいか考え、表紙のロゴや、写真は展示物の部分的な拡大と全体というパターンでいくことなどを全部決めたわけです。そのパターンはマンネリといわれようが、少なくとも三、四年は続けようと。

池谷　そうして第一号ができあがったのですね。

野村　表紙に収蔵品を細部拡大して載せるというのは、かなり斬新なことだったんじゃないかと思いますね。

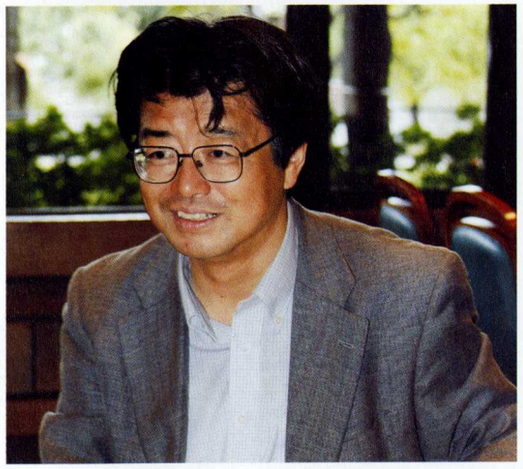
石毛　表紙裏のページに全体写真と解説があり、一ページ目は「みんぱく・えっせい」。著名人のちょっとしたエッセイです。第一号の館長対談が小松左京さんでした。それから教官によるエッセイには、わたしが見本として「よばい棒」というのを書きました。

池谷　石毛先生のおっしゃったフォーマットが今でも続いているところもありますね。

石毛　当時は企業のPR誌、それもあまり商品の宣伝ではないものが大変盛んだったころで、そういったものはカラーをよく使って人目を引きつけるけれども、うちはその予算がない。だけど真っ黒な誌面というのはどうも…。それで二色刷りにしました。

野村　表紙のロゴの文字は、ずいぶんデザインされていますよね。

石毛　お役所の刊行物のイメージだけはやめようと。月刊で出すということは、研究者がやるほかない。だから負担がかからないように、フォーマットをちゃんとしておきたかった。いちばん僕が奮闘したのは、編集権の確立です。買い上げについては、管理部の会計がお金を出すでしょう。すると管理部の考えるモデルは、お役所の出す広報誌になる。いろいろ文句はつけるわ、予算は考えないわみたいな話になる。だから、編集権については、



2006年4月～現在　編集長
池谷 和信（いけや かずのぶ）
本館民族社会研究部

1977年10月～1981年3月 編集長
石毛 直道（いしげ なおみち）
本館名誉教授

編集する教官たちがもつ、と。これは一種の言論の自由みたいなもので、教官に一切の判断をゆだねる。それを確立するのが大変でした。

池谷　非常に新しい体制を作ったということですか。

石毛　例えばイベントのお知らせをするにしろ、お役所的な触れ書き式のものをお役人さんたちは考えるけれど、口出しをするなというような。

池谷　あらたな歴史を歩む最初のひとつが広報誌なら、無料で配布するとか駅に置くような体制をとるのが普通だと思うんです。しかし「友の会」には販売するが一般には売らないという、特殊な状況を作りましたね。

石毛　民博へ来たらもちろん買えるけどね。本屋で売れないか考えたことがあるんですが、まだ民博ができる前で、そんな無名のところを取次店が相手にしてくれるはずがない。むしろ「友の会」の会員を中核にした配布方法のほうがいいと思いました。それから、ジャーナリズムですから、新聞社だとか、そういったところへは送るようにしたはずです。

池谷　開館の準備もあり、ご苦労なさったでしょう。

石毛　第一号を出すまでが大変でした。わたしはオセアニア展示の全体のチーフだった。しかも展示作業と並行しながら図録も作っていたので、とにかく第一号を出すまでは忙しかった。

池谷　表紙に初めてモノを選んだ方法が、ほぼ三〇年間続いてきていますよね。

石毛　その当時、わたしが図録の編集長みたいなことをやっていて、たくさんの写真を撮っていたんです。それをまず使っていくことに決めました。

池谷　民博は博物館なので、モノが基本。そういう理念のようなものがあったのですか。

石毛　それもあったかもしれないけれど、いちばん効率的な方法だったのです。

1994年5月～1998年12月／2004年4～6月 編集長
野村 雅一（のむら まさいち）
京都外国語大学教授
本館名誉教授

広がる筆者の輪、読者の輪

池谷　『月刊みんぱく』が軌道に乗ってきて、野村先生が一九九四年五月号から引き継がれました。

野村　僕の前は、秋道さん（現、総合地球環境学研究所）。秋道さんの編集長時代に僕は編集委員に加わり、編集長を引き継ぎました。

池谷　石毛先生からのフォーマットは、ずっと維持されてきたのですね。館長対談を一番大きな目玉にしたことが、最初のころは非常に成功した。しかし館長が交代して対談がなくなりますよね。雑誌のイメージが新しくなりましたね。

野村　新年号など折々には館長の対談を入れたのですが、基本的にはいろんな人に来ていただいて、編集長がお話を伺う。僕のときにはファッション研究家の深井晃子さんから始まり、民族学や人類学の専門家じゃない人をあえてお呼びしていました。

池谷　そこにはどんなねらいがあったのですか。

野村　ひとつは民博をめぐる人の輪みたいなものをできるだけ広げていったほうがいいと考えたんです。民博は全国の大学の共同利用機関で、専門家の先端的な研究機関なんだけれども、その先生ばかり出てきたんじゃ、研究者の広報誌みたいになってしまう。それでできるだけ、専門家であっても分野がちょっと違う人に、しかし人類学や民族学と関係のあるテーマでお話を伺うことにしたんです。

池谷　その意味では、一般の人にわかりやすく民族学なり文化人類学なりを伝えるんだという、初期の基本理念はずっと続いているわけですね。

石毛　それに編集に携わることは教官自身の勉強にもなりますよ。研究者というのは、文字で自分の仕事をあらわしていくわけで、学者仲間だけじゃなく、一般の人びとに自分の仕事をわかってもらう文章が書けなけれ

ばいけない。編集をやったら、人の文章に手を入れたりするので、それがもの書きのトレーニングとしていいですね。

池谷　それは感じますね。さらに文化人類学の研究者ではない千里文化財団の方々が一緒にやってくれたので、わかりやすさを厳しく追求できるシステムができたように思います。

石毛　もうひとつは、ジャーナリスティックなセンスを養うことができる。この欄には誰のどんなものを載せたらおもしろいかとか、考えなきゃならないでしょう。

池谷　今でもいちばん大事なことですね。誰に書いてもらったら期待どおりの効果をえられるのか、毎回頭をいためています。

野村　制作には外部の人が加わっているほうがいいですよ。研究者だけでやっていたんでは、編集も制作もうまくいかないと思う。

池谷　三〇巻のうちの前半は安定した状態が続き、『月刊みんぱく』は広報誌として非常に順調だった感じを受けますが、問題点もあったのでしょうか。

野村　やはりずっと続けているとマンネリになってきます。この雑誌は最初からかなり完成されているんですよ。第一号から読みごたえがあるといわれてきました。しかしうまくいってるから続ければいいっていうものじゃなくて、うまくいっているうちに変えたほうがいいと思っていた。うまくいってるからもったいないじゃなく、失敗してもいいから変える。それで、まず表紙のロゴを変えようと提案しました。

池谷　これを変えなければならないという背景には、やっぱりマンネリ化があったんですか？

野村　同じ体裁でずっと来ていたでしょう。表紙も収蔵物、収蔵品の細部のデザインで来たんです。趣をとにかく変えようというので迷いながら、いろいろな人に相談しました。すると最初の「みんぱく」の字体がやっぱりいいというんですよ。やわらかくてね。有名な編集者もこの「ぱ」があるからいいっていうんです。

池谷　だからこのスタイルが長く続いたのですね。

野村　これは僕の好みというか。とにかく何でもちょっと新しいのが好きなんで（笑）、変えようと。でもそこまで来るのに相当長い時間が経っています。新装された号が出たのは一九九九年四月で、すでに編集長は僕から栗本さん（現、大阪大学）に変わっていました。

2004年4月号の表紙　1999年4月号の表紙　月刊みんぱく第1号の表紙

石毛　パターン化すると制作が楽になるだけじゃなく、読者がそのパターンに慣れて安心する。だから、少なくとも三、四年は続けようと当初は思ったんだけれど、こんなに長続きするとは考えていませんでした（笑）。

野村　それだけ完成度が高かったということでしょう。

池谷　当時、この雑誌を月刊誌として続けるべきかという議論はありましたか。

野村　それについては議論はまったくなかったです。民博の刊行物のなかで、いちばん広く読まれていたし、新聞、雑誌でもよく『月刊みんぱく』の話が引用されたり、紹介されたりしたので、実際かなり読んでもらっていたと思うんです。だから、九〇年代はこれがなくなったら、どうしようもないという感じでした。今のようにホームページとかウェブサイトもほとんど利用されていなかったわけですから。

池谷　石毛館長時代に、特に博学連携といって、小学校、中学校の先生の総合学習と連携する。それで、小長谷編集長の時代に、『月刊みんぱく』を「友の会」の会員だけでなく、小・中学校に大量に送り出した時期があります。館の方針としてはもっとPRしたいというのもあるのでしょうか。また、「友の会」の会員が減少傾向にあり、危機の時代であったのかなとも思っているのですが、そのへんは何か背景があったのでしょうか。

石毛　総合学習だとか、いろんなことがいわれながら、一方では法人化になるということがありました。そうなると博物館が多くの人びとの支援を受けることが大変大事で、子どものときから民博を知っているという人が増えたらいいなと。また、ヨーロッパでは学校の授業で先生が生徒を博物館に連れて来ています。民博もそうなれば入館者が増えていいと思ったこともあります。

池谷　遠足などで来られる学校の生徒数は、入館者数として大きな数字になっていますね。

野村　近隣の小・中学校にかなりの部数を送ったようです。でも、小学生には難し過ぎる。中学生にも難し過ぎる。だから、まず先生に読んでもらって、授業のなかで紹介してもらったら、ということだったらしいですけれど…。

池谷　誰が読んでくれるか、というのを想定してフォームを変えるということはなかったわけですね。

野村　だから、いまでもこれは大人の雑誌で、わかりやすくといっても、小・中学生には最初から無理だと思います。

石毛　開館当時の民博の展示の解説は、中学生にわかるようにという方針だったけれど、実際、中学生には文章としてはわかっても、その背景だとか、いろんなことを知っていないと、やっぱり理解しにくい。それと似ていますね。

法人化による変革

池谷　野村先生の編集長時代というのは二回あって、一回目は安定していたけれども、少しずつ変わる兆しが見えた時代です。二回目は二〇〇四年で、この三〇年間でいちばん大きかったのではないでしょうか。このときに法人化という民博の改革がありました。そして『月刊みんぱく』も表紙からがらっと変わった。特に表紙に太陽の塔が登場して、衝撃があったと思うんです。

野村　これは徹底的に全部変えるということで、準備を進めたんですよ。それまで民博が編集し、千里文化財団が発行する形でしたが、経緯は知りませんが、法人になるから、民博が発行するという話になったのです。

池谷　それによって、すべてが変わったんですね。

野村　そうです。当初は市販もしたい、広告もどんどん入れたいということでした。それでわたしのところに、長いこと編集長をしていたから、またお願いしたい、という依頼が来たんです。実際、直接かかわったのは二〇〇四年四月～六月号の三号ですが、半年以上前から準備をしました。市販するならと紙も変わっています。それまではコピーしたら裏が写るようなもので、今の時代、これではちょっと貧乏くさいかなと思って変えました。

石毛　紙質については、最初わりとお金のことを考えた。安くて二色に何とか耐えるものをと。お金があったらもっといいのを使いたかったですよ。やはり紙質を変え、現代風の雑誌になった（笑）。

野村　ちょっと古びたのが一挙にイメージが変わりましたよね。それに市販なら背表紙があるほうがいいというので、広告を入れて背表紙もつけることを考えました。雑誌としてはそのほうがおもしろいし、メリハリもできる。ページをめくる楽しさがあるから。それなら広告を入れようということで準備していたんです。しかし残念ながら、いろんな制約がありまして、市販ができなくなりました。広告も入れられないとか、広告をとってもそれがどの部局の収入になるのかわからないという話になった。これは民博の内部というよりも、結局法人化の法制的な規制でそうなったと聞いています。

池谷　それと編集長の期間も変わりました。以前のように、ひとりの編集長が何年も続けられなくなりました。

野村　次の一年間は、八杉さんが編集長でまたスタイルが変わった。今、池谷編集長でも変わってきてますよね。

池谷　今やっている経験でいうと、毎号の特集の企画など負担が教官に全部かかってくるという問題もあります。特集が始まってまだ三年しか経っていませんので試行錯誤の時期だと思いますが、今後を考えると、これがいちばんいいのかどうか…。

野村　特集方式というのは、もともと梅棹先生は好きじゃなかったでしょう。特集の原稿というのは全部が全部いいものがそろうとは限らないので、なかなか難しい。雑誌は自由にいろいろあったほうがいいという考えです。

石毛　市販の雑誌だと、特集のテーマによって売れ行きが変わっちゃうくらい重要になってくる。

野村　そうですね。一方で、雑誌は継続性が問われるので、いい連載がないと雑誌になりません。そのためにも、いい連載を作る。そこに特集がプラスされる。

池谷　今は連載ものはわりと短く、読みやすくするよう心がけていますが、どう思われますか。

野村　研究者って、いろんなことを知っているから、原稿はいくらでも長くなる。短くするというのはとても難しくて、みんな苦労するでしょう。依頼したら大抵長くなる。縮めてもらうのに苦労するので、最初から短く短くといっておかないといけない。原稿は短いほうが絶対読まれるんですよ。だから『月刊みんぱく』も読み手からしたら今はすごく楽しめる雑誌になっていると思います。でも、ひとつだけ注文させていただくと、書き手のことも、もう少し考えてあげたほうがいいんじゃないかと思うんです。

石毛　短い文章というのは本当に難しいし、たとえば新聞にコラムを連載するでしょう。週一回でも一年で五〇回ぐらいになります。そのくらい書いても、一冊の本にはならないんですよ。

池谷　刊行の当初では対談、そしてインタビューや特集が続くのですが、フィールド・エッセイも根強く続いています。現場に行ってエッセイを書けるという、これはひとつの確固たる、時代を超えた伝統のような気がします。その意味では、やはり三ページぐらい必要ですね。

今でも最後のところが「フィールドで考える」というエッセイになっていて、こういうところがちゃんと書けるというのは大切です。今、ちょっと写真に過重しているので、もう少し文章できちんと書けるようにすることは大切だと思います。

野村　何かまとまったことを書いたという気になれるくらいの原稿のスペースも必要です。最初から短いもの

ばかり要求するのはちょっと酷かなと。

池谷　その点は考えなければいけないと思っています。

特集については、むかしとは全然違うテーマをできるだけ現代社会との接点で編集していきたいと考えています。

石毛　それは大変結構なことだと思います。

今のカラーを使ったグラフィックのレイアウトも、これだったら企業のPR誌にしても遜色ない。それで中身もがっちりしている。『月刊みんぱく』の将来の目標としては、これだけのものを、もっと世のなかの人に読んでもらうことじゃないですか。何とかうまく市販できないかなと思うんです。

野村　わたしが最初に編集長をしていた一時期、東京の三省堂や大阪の旭屋に置いてもらっていたんですよ。三省堂では一ヵ月に三冊ぐらい売れていた。背表紙すらない雑誌をわざわざ探して買ってくれるというのは、すごいことですよ。三省堂の雑誌コーナーのところに『月刊みんぱく』とタイトルが出ていたから、あるのはわかるんだけれど、平積みはしていない。それを探して買ってくれるというのは、よほど奇特な人ではないかと。だから、買ってくれた人は一〇〇人分ぐらいの読者の値打ちがあると思うんです。手にとってお金を払って買ってくれる人がちょっとでもいるというのはすごく意味があるし、書くほうにとっても書きがいがありますよ。

石毛　ただ、販売というのは、ある面倒ももっているんです。売るようになったら、必ず売れ行きが心配になる。そのため売れるように書かなきゃならない。すると、プロのもの書きとは違う人びとの本当に伝えたいことが、商業主義によって曲げられるということが出てくる。そのへんをうまいことできるようになるのが、ほんまの学者であり、もの書きでもあります。

国立民族学博物館関連図書フェア
ジュンク堂書店仙台店（2003年8月開催）

紙媒体としての存在意義

池谷　この雑誌を無料で配布というのはあまり勧めないですか。

野村　今、世界的にはフリーペーパーが増えています。ヨーロッパでもアメリカでもそうですし、日本にもたくさんあるでしょう。おもに情報誌です。博物館がフリーペーパーを配布し、しかるべきところに置き、大勢の人に読んでもらうことに関しては、財政的な問題もありますが、日本はむしろ遅れているほうだと思うんですよ。だからその先駆けみたいな形で、無料で町で配って読んでもらう。それはひとつの方法だと思います。フリーペーパーというのは広告が全面的に入っています。企業の協賛や広告で経費のめどがたったら、民博や人類学のいろんな面の発展から考えてもフリーペーパーのほうがいいんじゃないかと思います。国民的なレベルでも有益なわけですから。

石毛　ただ、フリーペーパーの場合は、大体は無差別にたくさん出す。そうすると巨大な部数を作らないと意味がない。むしろ、雑誌のかたちは残しながら、ホームページ上で流す。

野村　でも、ホームページやウェブサイトと紙媒体の役割は違いますよね。ちょうどインターネットが世界的に盛んになってきたのと同時に、今度は雑誌がフリーペーパーとして大量に流れるようになってきた。そこへ広告もどんどん入ってきて。やっぱり需要があるんですよ。さまざまなメディアがあっても、雑誌の代替はできない。活字は活字だと思う。そのあたりをどううまくやっていくかはちょっと難しい。

池谷　そうですね。ところで雑誌を作るときわたしが感じているのは、特集で、必ずしも文化人類学だけの分野の人を集めてもうまくいかない。人文学というか広い視野で誰がいちばんおもしろいことをしているのかという人選でないと、なかなかうまくいかない。かつて、書き手は館内で全部そろっていたと思うんです。今はかなり目配りをしていろんな分野とクロスしていかないと、おもしろい研究もできないような時代になっていると思います。

石毛先生や野村先生は最初からそういうかたちでされてきましたが、今は逆に非常にたこつぼ化しているという、学問の姿勢があると思います。しかし世のなかは広いほうに目が向いているのだから、書き手を探すのが難しくなってきています。

野村　何らかのかたちで民博とかかわっている人たちが書いているので、書き手についての問題は全然ないと思いますよ。ただ、研究者ばかりが中心になるとちょっと狭くなる。民族学、人類学の研究者コミュニティということがしきりにいわれるのだけれど、原稿依頼をすることで人の輪を作っていく、つないでいくという意味で研究者以外の人にも加わってもらったほうがいいと思う。

池谷　そのへんはNGOやNPOとか、いろんな活動家が書き手におられます。

石毛　そして、民族学ないし文化人類学というのは何でもできるんだと、しめしていかなければならない。

池谷　そのことについては厳しい時代になっているともいえるわけですね。

石毛　たしかに大変ドラスティックな時代だけど、それはそれで今までのスタイルをずっと続けるというのは、あと五〇年やるんだったら意味がある。偉大なるマンネリといえる。でも、こういった読者あってのものは、そのときどきに変化するのは当たり前のことです。

この雑誌を三五〇冊すべて並べるとすごいでしょうね。例えば、「友の会」の会員さんが全部とっていたらたいへんな財産だと思います。

野村　財産といえば雑誌の二次利用ですよね。Q&Aは、河出書房新社から出した『100問100答 世界の民族』と『100問100答 世界の民族生活百科』にまとめられ、二次利用として他にも何冊か出てますよ。『100問100答 世界の民族』の続編で出ています。最初の本は台湾で『世界之民族』（晨星出版、二〇〇〇年）として中国語訳が出されている。ある程度国際的な評価もえていると思います。

池谷　もう少し二次利用を増やす努力が必要ですね。ずっと続けている本誌の「生きもの博物誌」は、すでに出版されている『世界民族博物誌』の続編というかたちも考えられますし、今後どう作るかがひとつの課題です。

野村　それをやろうとしたら細切れ原稿はね…。ある程度まとまったものじゃないと本にならない。でも、本来本を作るための雑誌じゃないんだから、雑誌は雑誌という考え方もあって、そのへんは難しいですよ。

池谷　一年か二年前に『月刊みんぱく』の存続について議論がありまして、隔月刊にしたほうがいいという意見が出たり、もうやめてしまえとか、無料化してホームページで見られるようにするとかありました。わたしとしてもこれは非常に難しいテーマで、とりあえず三〇巻を達成した段階で、どういう時代が見えてくるのか考えようと思っています。非常に未知なる領域なのです。

三〇年前のスタイルは消えることなく、でもどこかから変わってきているというのは今日わかったと思います。今後体力が続く限り走り続けるべきかいなか、ご意見があればお伺いしたいのですが。

石毛　面倒なことはあるかもしれないが、伝統として研究者が編集してきたわけです。研究者にとっても編集にたずさわることによって社会との接点、あるいは自分の文章の欠点だとか、いろんな面で気づかされることが多くあります。そういった意義もやっぱり考えたほうがいいでしょう。必ずしも読者のためだけではない、と。

それから、これが全部電子メディアでいくかといった話で、やっぱり当分そうはならないでしょう。紙はとっておけるということに大分意味があります。

野村　しかし、三〇年近く続いてこれからを考えたとき、全部そろえていたらどれだけの値打ちがあるかという問題がひとつあります。僕が三年くらい前にふたたび編集長をやったときは、これをそろえてとっておくということは考えていなかったんです。石毛さんの意見とはちょっと違うんだけど、僕はリニューアルする時点で、雑誌は読んで捨てたらいいものだと思っていたんですよ。知識の宝庫みたいに索引を作って、これで何でもわかるんだと思わなくてもいいんじゃないかと。もちろん、内容が充実しているからとっておくこともできるけど、捨てるものでもいいんじゃないか。

二〇〇四年のときは市販が前提にあったから、会員だけのものとして保存するのでなく、読み捨てというのを考えていたんです。全部そろえて意味があるというのは、会員制ならありき、なんですよ。でも家のなかに本棚のない人もいっぱいいる。それにもかかわらず雑誌はむしろ増えている。すると、読み捨て的な面があってもいいじゃないか。それもあって、フリーペーパーはどうかといっているんですよ。

池谷　初期のころは、「友の会」という新体制が非常にうまくいった。だから、それを変えるときというのは、中身だけじゃなく、全部を変えなければならないんですね。システムもまた変えなければならないので、中途半端な変革だとできない。かなりの決断が要ると思います。

野村　僕は、雑誌という紙媒体は絶対なくならないと思っています。少なくとも今世紀中はね。でも、配布とか、流通のかたちはいろいろ変わってくるんじゃないですか。三〇年前、博物館が月刊誌を出すというのはとても画期的なことだった。すごく先駆的というか、日本にまったく例がないでしょう。それに僕自身もかかわったわけなんだけれど、今また産みの苦しみで試行錯誤しておられる。そのときに、内容とか体裁だけじゃなく、どういうふうに

乗車の待ち時間にフリーペーパーを手にする

インターネットは普及し駅にも端末が置いてある

利用してもらうか。その点から考えながら、この雑誌の形態を生かしてもらいたいです。

池谷　実際、僕も、野村さんの改革の場に一緒にいたんです。二〇〇四年は改革をやろうとしたけれど、販売がうまくいかず、どこかでブレーキがかかった。

野村　それは制度や組織が時代の変化のスピードとあわなくなっているからでしょう。その後、一年ごとに体裁が変わっているのもやむをえない。むしろそのほうがいいのかなという気もしますよ。

池谷　世のなかや民博自体の、いろんな状況が変わったことが『月刊みんぱく』と非常に深く結びついていますね。

研究者主体で作る意義

石毛　『月刊みんぱく』がある限り、きちんと続けてほしいのは、やはり研究者の主体性で作るんだということです。お金さえあったらプロの編集者に任せ、その人たちが読者に受けそうな企画を立ててということになる。だけど、そうなったら民博で出している意味はなくなるわけで、編集に関しては、研究者たちが主体的にかかわって続けていくようにしてほしい。

池谷　『月刊みんぱく』へのもっとも大きな期待は、やはり続けてほしいということでしょうか。

石毛　そうですね。継続こそ力なりです。

野村　広い意味では、社会教育をになう研究博物館のためになるようがんばってほしい。

池谷　博学連携ですね。

野村　今、僕は大学で講義をしているけれど、教育への要求がものすごく厳しくなっています。それを考えると、民博が出す社会教育のメディアに対して、要求とか、条件がすごくきつくなっているのも当然かと思います。それにどうこたえて先に行くか。そこだと思うんですよ。やめるのは、今以上のものができるときでしょう。

池谷　そういう意味では、まだ答えのない状況が続くと思うのですけれど。石毛先生、最初のスタートのときも未知なる領域といいますか、混沌としていて、でも集団の勢いがあり、何か目的に向かっていたように感じます。今、そのころにもう一回帰らなければならない部分もあるのかもしれませんね。

石毛　なかったものを作るというのは、エネルギーは要るけど、やっぱりおもしろさはあるんです。むしろできちゃったものを継続することのほうが、じつは大変なんですね。

池谷　野村先生は時代のいちばんの節目で改革をされ、難しさもよくわかっていらっしゃると思います。そのためにこの雑誌に対する愛情も非常にもっておられる感じがしますが、もう少しこうしたかったというのはありますか。

野村　それは、一言でいえばもっと多くの人に読んでもらいたい、そして、書き手も満足できる雑誌にしたかった、というのがあります。それができたらいいんじゃないかなと、今も思っていますけどね。この雑誌は民博のいわば社会的な顔の役割を果たしてきたわけでしょう。全国の会員へは毎月届くわけです。民博からの発信というか、メッセージのいちばんの基本になっている。そのことは今もいえると思います。

池谷　今回伺った話は全部、現在につながっているのですね。この雑誌の歴史をふりかえり、変わる部分と変わらない部分とがあったことがよくわかりました。難しいことだけれども、時代に合ったものを出していかなければならないと、非常に責任を感じます。

今日は短い時間で、約三〇年という長い時間をまとめてお話しいただきましてありがとうございました。

『月刊みんぱく』歴代編集長からのメッセージ

日本の博物館の指針として

一九八一・四〜一九八二・七月号

小山 修三

（こやま しゅうぞう）
吹田市立博物館長
本館名誉教授

あのころの民博には尋常ならぬ熱気があった。わたしが入ったのは一九七六年一〇月、研究部はまだ三〇人くらいだったが、開館準備の仕事が山積みだった。それでも全員が気にせず、（外見では）らくらくとこなしていたのは、民族学積年の夢だった博物館ができたという想いをもっていたからだろう。そんななかにあっても、民博は研究が最優先、論文を書くことが基本方針だった。学問の純粋培養場であるアメリカの大学から帰ったばかりのわたしには、それは当然のことと聞こえた。

ところが、とつぜん広報のラインが浮上してきた。委員会が作られ、よくある年二回の「博物館ニュース」にすると決めた。しかし館長室から、「ミニコミ誌ではない、広報誌である」とつきかえされてしまう。結局、編集事務を民族学振興会の千里事務局（千里文化財団の前身）が受けもち、委員を研究部、管理部から選び、石毛直道さんを編集長として、表紙カラー、紙面二色、二四ページの『月刊みんぱく』ができた。一九七七年一〇月発行が第一号である。わたしも委員にされ（抵抗したのだが）、そのうえ、二代目編集長となる羽目になってしまった。それが今も大きく影響していると思う。

今、日本の博物館は氷河期にあるといわれている。入場者が減少し、地方博物館のなかには廃館に追い込まれるものさえ出ている。予算不足が響いているのは明かなのだが、最大の原因は、博物館が自己完結した世界に閉じこもり、市民の知的要求に応えていないからだと思う。この状態は民博にも当てはまるのではないか？民族学と博物館をあわせ称しているために、アカデミックの世界に逃げ込んでいないだろうか？

今、欧米の博物館は、停滞から脱して、上昇機運にあるという。展示法や、アクセス、ショップなどの観客サービスに力を入れ、とくに広報の充実がめざましい。その点で、『月刊みんぱく』がわかりやすく、おもしろく民族学を市民につたえるという、広報の原点を保ち続けていることは、民博ばかりでなく、日本の博物館の指針となるものとして期待していいと思う。

今後に期待を寄せて

二〇〇五・四〜二〇〇六・三月号

八杉 佳穂

（やすぎ よしほ）
本館民族文化研究部

継続は価値

わたしは『月刊みんぱく』が発行されてきた三〇年の内二六年を民博で過ごしてきたのだが、そのあいだ『月刊みんぱく』にはなぜか縁がなく、関係したのは最後の二年だけである。といっても最初の一年は単に手習い塾のコーナーを担当しただけで、編集に何のかかわりもなかった。だから編集ということを何も知らずに編集長を引き受けてしまったことになる。それは、『月刊みんぱく』が存続の危機に陥っていたからである。そこでもう一度原点に返って考えることにし、継続できるところは継続して、残りは見直すことにした。

民博は研究所である。だから研究のおもしろさを伝えることこそ、『月刊みんぱく』の使命であろう。幸い民族学というのは、人間にかかわるすべてを扱い、しかも世界の民族を対象にするのであるから、種は尽きない。いろいろな切り方がある。我々はそれを「呪う」とか「産む」とかいった動詞を用いて切りとることにして、特集を組んだ。しかし博物館をもっているのだから、特展や博学連携の特集を組んだり、各地の博物館にかかわる人に話題を提供してもらうコーナーも設けることにした。また民博は大学共同利用機関であるとともに、大学院をもっているので、全国の民族学研究者にできるだけ執筆者として参加してもらい、調査から帰った大学院の学生の新鮮なデータも提供できるように心がけて編集をおこなった。

巻頭エッセイは「世界へ世界から」としたが、それは、民博が世界の諸民族の資料の集積地であるとともに、その研究の発信地であり、世界のことを、そして日本のことを考える場所であることを象徴させている。

月刊誌は他の機関が出していないし、三〇年も続けてきたからもうやめようではなく、他では出せないものであるし、三〇年も続いたものであるから、もっと続けていこうというのが、悠久のむかしから未来へという博物館の根底を流れる思想に通じる考えではなかろうか。

30巻の歴史を回顧する

一九八二・八～一九八五・三月号

杉田繁治

（すぎた しげはる）
龍谷大学教授
本館名誉教授

役割と表現様式の再考を

『月刊みんぱく』第三〇巻まで到着おめでとうございます。わたしは三代目の編集長を務めましたが初期のころは楽でした。初代が全体の枠組を決めておかれたので、わたしはそれを踏襲するだけでした。『月刊みんぱく』の役割は「友の会」会員を始め、共同研究員や文部省関係の方々に民博の活動を通じて民族学の内容を広く知らしめることでした。研究者仲間に対しては『民博通信』がありました。『月刊みんぱく』の主たる連載は「みんぱく・えっせい」「館長対談」「みんぱくニュース」「民話の世界」「読者のページQ&A O」などでした。梅棹忠夫先生が館長をしておられたころはさまざまな分野の人びととの「館長対談」が大変興味深いもので楽しみにしている読者が多かったようです。後に中公新書として対談集が数冊出版されました。対談はたいてい吹田にある料亭「柏屋」でおこなわれ、編集長は対談の場に同席して話に合いの手を入れたり食事のお相伴に預かったりしました。「民話の世界」は、田主誠画伯によるシルクスクリーンの挿画が大変良くできていて楽しいものでした。「Q&A」は読者からの質問に民博の教官が答えるというもので、後に読者のオピニオンも入れて「Q&A O」となりました。ただ質問や意見がなかなか集まらないので苦労したこともあります。

最近はカラーもふんだんに使われてきれいなものになっていますが、当時の表紙は今と同じようなカラーを使っていますが、カラー写真がまだ高価だったので、内部の写真は白黒か擬似カラーを使っていました。表紙も初期のものから何回か変わっているようです。内容も一新されて、ある事柄に焦点を当てた特集的な編集になっているようです。それなりにいろいろ工夫がされているようですが、どのような読者を想定しているかによって効果も異なるものと思われます。最近はテレビや外国旅行を扱った雑誌などによって世界の民族文化が紹介されています。三〇年前とは世間一般の情報環境がかなり違っています。『月刊みんぱく』の役割とその表現様式を再考する必要があるのではないでしょうか。

一九八七・四～一九八九・一二月号

中牧弘允

（なかまき ひろちか）
本館民族文化研究部

編集長の役得

一九八〇年代後半の五年間は『月刊みんぱく』ともっとも親密なおつきあいをした時期である。そのあいだ、一九八七年四月から一九八九年一二月までは編集長をおおせつかっていた。編集長といってもそのころは、今とちがってだいぶ楽だった。目次構成はほとんど変化がなく、館長対談の相手や「みんぱく・えっせい」の候補者えらびに多少頭をひねるぐらい。色校と称する最終校正をのぞけば千里文化財団の編集スタッフにもっぱら実務を依存していた。

わたしはむしろ編集をとおして体得することのほうが多かった。まずは、わかりやすい、やさしい文章にするだけでなく、広報誌として、民博に親近感をもってもらう雑誌に仕上げることに腐心した。編集長はすべての文章に目をとおすので、それだけ知識や教養も身についたはずであるが、さだかではない。何よりも楽しかったのは館長対談に同席することだった。対談を黙って聞くだけでなく、ときには質問をしたり、酒をついだりすることも任のうちだった。梅棹忠夫館長は対談をまとめて一冊の本にすることを心がけていた。そのため人選はシリーズにふさわしい構成となるよう、はじめから照準をさだめていた。こうして『対論「日本探求」―外国人の日本研究』『「知」のコレクターたち』『「知」のハンターたち』などができあがっていった。思えば知的生産とその"再"生産の作業現場に参画していたのだった。のちに本誌をもとに『100問100答 世界の民族』『世界民族博物誌』『キーワードで読みとく世界の紛争』などが出版されるが、これまた再生産の見事な結晶といえる。

不安といえば、館長対談が万が一継続できなくなったときの対応ぐらいだった。それほどに館長対談は刺激的で、館員はもとよりマスコミや「友の会」会員など読者を惹きつけていた。梅棹館長の退任後、「みんぱく・いんたびゅう」に切り替わったが、このときも歴代編集長が集まって協議をした。求心力や連帯感がそれなりにあった時代だった。

一九九〇・一～一九九四・四月号

秋道智彌

（あきみち ともや）
総合地球環境学研究所教授

梅棹―佐々木時代のリリーフ・エース

ぼくが編集長を務めた時期は、野村さんについで長いことだろう。初代の梅棹忠夫館長から二代目の佐々木高明館長にまたがっての時期であったので、足かけ五年ほどと記憶する。梅棹館長が退任されるさいに再任され、編集長として役を引き継いだわけだ。

八〇年代中葉の民博ではいろいろなことがあり、流動的であったが活気に満ち溢れていた。『月刊みんぱく』の編集内容にもそのことが反映されていた。発刊当初からの館長対談に編集長が同席することになっており、ぼくもそのスタイルを踏襲した。

佐々木館長になってからは、そのスタイルを一新した。編集長による対談が巻頭の目玉企画とされた。編集委員の仲間や千里文化財団の編集スタッフとはシリーズの企画や対談相手の選定をめぐってずいぶんと議論し、頭を悩ましたものだ。

今から思えば、ずいぶんといろいろな方と対談する幸運にめぐまれた。岩田慶治先生と鶴見良行先生との対談はそれぞれの先生の対談集（平成一八年発刊）に再録されている。鶴見先生との分は、残念だが先生にとり生前最後の対談となった。

ぼくの編集長時代、エッセイに相当する「エスノグラフィッティ（グラフィッティは落書きを意味するイタリア語で梅棹原案）や「民族博物誌」を新規の企画としてはじめた。とくに「民族博物誌」には毎回、田主誠さん作のシルクスクリーン挿画が登場した。田主さんにはずいぶんとお世話になった。そのシリーズは、二〇〇三年『世界民族博物誌』として刊行された。

『月刊みんぱく』の編集を通じてずいぶんといろいろなことを勉強した。そして、さまざまな人との出会いを体験することができた。今後も、継承と革新をちりばめた楽しい誌面を期待したい。

二〇〇〇・四～二〇〇一・三月号

小長谷有紀

（こながや ゆき）
本館研究戦略センター

「博学連携」を担った二年間

二〇〇〇年四月、『月刊みんぱく』の編集長であった同僚の栗本英世氏が大阪大学へ異動することとなり、急遽、編集長を引き受けることとなったとき、わたしは二年の期間を約束した。当時、大学に先んじてすでに国立の博物館は独立行政法人化し、経営の効率化が求められるために危機感が広まっていた。いっぽう、小中学校では「総合学習」という科目が何の準備もないまま開始され、義務教育の現場では不安が高まっていた。そこで、『月刊みんぱく』では、共同利用機関としてこれまで蓄積してきた研究成果を、博物館を通じて、子どもたちの学習に利用してもらうことに焦点をあてよう、と編集方針を定めた。博物館と学校をつなぐ、いわゆる「博学連携」の任を積極的に担う二年間、と定めたのである。

「総合学習」には「環境」「国際」「福祉」「情報」の四つの柱が設けられていたので、編集長がもっぱら担当するインタビューのコーナーはこれら四つに絞った。例えば、「環境」では総合地球環境学研究所所長の日高敏隆さん、「国際」では早稲田大学の平野健一郎さん、「福祉」では高齢でなお現役の吉野裕子さん、長寿社会のありかたを提言する一番ヶ瀬康子さん、「国際」でもあり「福祉」でもある大阪大学ボランティア人間科学講座の内海成治さん、中村安秀さん、「情報」では武庫川女子大学の藤本憲一さんなどであり、加えて「博学連携」そのものをテーマとして、教育学の上田信行さん、ミュージアムエデュケーターの染川香澄さんらに登壇していただいた。

これらの人びととのインタビューはいずれも、わたしにとってえがたい「一期一会」の修行の場であったと思う。相手のことばをうながし、引きだし、うけとめる、それは一〇〇パーセント、アドリブによって成り立つ、たった一度きりの舞台のように、わたしをいつも奮い立たせた。そのほどよい緊張感は読者にも伝わっていたのではないだろうか。観客の居ない舞台なのに、それでも読者の視線を身近に感じることができたのは、おそらく、編集スタッフとして石川泰子さんたちがいつも的確なサポートをしていてくれたからだろうと思う。

発信源としてのさらなる挑戦

一九九九・一〜二〇〇〇・三月号

栗本 英世

（くりもと えいせい）
大阪大学教授

よき伝統は保ち、使命をはたす

わたしは、一九九二年四月の民博赴任と同時に、当時の編集長、秋道智彌助教授の「一本釣り」にあって、『月刊みんぱく』編集部に加わることになった。以後八年間、二〇〇〇年春に民博を去るまで編集部に籍を置き、最後の一年間は、野村雅一編集長を引き継いで、編集長を務めた。当時の編集委員は、『月刊みんぱく』は民博にとって最重要の広報メディアであり、研究から展示にいたるあらゆる情報は、編集部に集中すべきであると考えていた。また、編集部は、たかい自律性をもっており、こうしたことから、編集長をはじめ編集委員の意気は軒昂（けんこう）であり、強い自負心があったように思う。

新人のわたしにとって、『月刊みんぱく』の仕事は、民博という組織の全貌を知るうえで、そして雑誌の編集という仕事を学ぶうえで、とてもプラスになった。とくに編集については、校正や割り付けのしかたから、紙面の作りかた、それに作文技術にいたるまで学ぶことができたのは、ありがたかった。千里文化財団の優秀な編集者のおかげである。また、「『月刊みんぱく』編集部編」で河出書房新社から刊行された三冊の本――『100問100答 世界の民族』（一九九六年）、『100問100答 世界の民族生活百科』（一九九九年）、『キーワードで読みとく世界の紛争』（二〇〇三年）――の編集のお手伝いができたことも、よい経験になった。

編集委員としての最大のよろこびであり、スリルでもあったのは、「みんぱく・いんたびゅう」の仕事である。人選と編集には苦労したが、民族学・人類学だけでなく、各界の第一線で活躍している人たちとの座談は、まさに「役得」であった。

近年は、広報誌としての『月刊みんぱく』の位置づけも変化していることと思う。編集部OBとしては、変化に対応して、たえず刷新をおこないながら、よき伝統は保持して、本来の使命をはたしていただきたいと願うしだいである。

二〇〇四・七〜二〇〇五・三月号

長野 泰彦

（ながの やすひこ）
人間文化研究機構理事
本館民族文化研究部

役割の再検討

出版委員長を務めていたとき、民博の出版物に関する外部評価をはじめて実施した。出版界で活躍する方々と出版に実績のある研究者にお願いして、出版物の総点検をしていただいた。『月刊みんぱく』は出版委員会の所轄ではなかったので評価対象ではなかったが、民博の草創期を知る人が大半だったためか、『月刊みんぱく』も含んだ批判が多く聞かれた。

結論は①民博は自家出版の仕組みが整いすぎている、②外部の編集者が目をとおす世界へもっと積極的に出てゆくべき、③館全体としての広報戦略が見えない、の三点に集約される。①と②はまことにごもっともで、教官は出版したいものはすべて民博内部で出せる。そのため、推敲段階で叩かれることがなく、教官の独りよがりがはびこる、という訳だ。これらについては、その後幾つかの策を実施して、やや改善の兆しが見られると思う。

いちばん頭が痛かったのは③だった。草創期には『民博通信』を研究連絡誌、『月刊みんぱく』を「友の会」会員をも対象とする一般的な博物館広報誌、という仕分けがなされていたようだ。それぞれに特長を出した企画内容だったと思うが、共同利用機関である点が重視されるころから、研究者仲間での「連絡誌」を校費で出すべきか、との批判が外からあり、『民博通信』を研究広報誌と位置づけざるをえなくなった。スタイルの改変をおこなったころから研究広報誌としての傾向は強くなり、読み応えがある代わりに、重く堅くなってきたように感じる。評価委員たちはこの流れを敏感に察知しており、一部の委員からは『民博通信』の内容は『研究報告』に格上げし、『月刊みんぱく』を館全体の広報誌とせよとの意見も出ていた。

『月刊みんぱく』は数年前からテーマを定めて特色のある方を対談の相手に選んだり、特集を組んだりしているが、ある意味で評価委員の意見とパラレルだとも解釈できる。私が編集長を引き受けたのは評価の二年後で、前任者の方針を引き継いだが、結果的には「一般公衆への供覧」を背景とした博物館の広報と「論壇」としての性格を併せもつ形へ一歩踏み出した。近い将来、館全体の広報の一環としての『月刊みんぱく』の役割を再検討する必要に迫られると思う。

二〇〇二・四〜二〇〇四・三月号

印東 道子

（いんとう みちこ）
本館民族社会研究部

民博を知る編集者との協働を

『月刊みんぱく』は、細身の身体にさまざまな情報をまとっているが、されど肩の凝らない魅力的な広報誌だった。民博の専任教官になる前には、毎月送られてくるたびに、民博の多様な研究活動や民族学の楽しさなどに惹かれ、必ず目をとおしていた。最初から最後まで一冊の広報誌に目をとおすのは、忙しい日常ではきわめてめずらしかった。それが苦にならない楽しさと分量が、この雑誌の魅力のひとつでもあった。

民博の教官になってから三年目でまかされた編集長職は、わたしには重く感じられた。この広報誌のもつ親しみやすい魅力をなんとか継続させたかったわたしは、編集方針や機能分担をあまり変えることなく、わたしなりに工夫をこころみた。とくに、フィールドワークの楽しさを伝えることに力をそそいだ。

編集長インタビューでは、さまざまなかたちでフィールドワークをおこなっている各界の方々に登場いただいた。南極、アメリカ史、チンパンジー、壺作り、ウミガメ、ピラミッド、気候変動など、多様な対象ではあるが、フィールドワークの実際とその楽しさを伝えたかったからだ。これは対談慣れしていなければ、かなり難しい作業だった。当時の『月刊みんぱく』の編集体制には、不慣れな編集長でもその重責をはたせるほどに、千里文化財団の編集者からのサポートがあった。その機能的な役割分担は、創刊以来の伝統によってできあがったものだろう。

法人化以降、編集の大半を民博の研究者が担うことになり、編集長の負担は甚大なものになっている。編集委託をする外部の編集プロは民博のことをあまり知らない。したがって、内容の企画、原稿依頼、内容チェックなどは編集委員会の責任になるために、以前より固い内容にならざるをえない。この雑誌の役割は民博の広報だけではない。民博の研究者を発信源とする民族学や人類学についての情報提供に価値があると思う。今後は、民博をよく知り、こよなく愛するプロの編集者との協働が何よりも大切になるだろう。

一九八五・四〜一九八七・三月号

小川 了

（おがわ りょう）
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授

情報をゆったり見せる工夫が必要

わたくしどもが編集に携わっていた二〇年ほど前に比べて、『月刊みんぱく』はまず紙質が変わって上等なものになり、その分文字は読みやすく、写真もきれいになりました。ときが移れば一般にものごとはよい方向に変わるのだとすれば、これは半ば当然のこととして、表紙のデザインが大きく変わったのは特筆すべきことでしょう。個人的な印象をいわせていただくと、二〇〇四年四月号以降の大変化にはとても驚き、一読者としてひそかに大拍手を送りました。なるほど編集責任者の意向でものごとは大きく変わることができるのだと実感したものです。そのときの表紙写真が、太陽の塔の顔そのもののアップ写真であったことも「変革」の印象を強める力をもつものでした。やはり表紙は大事ですね。

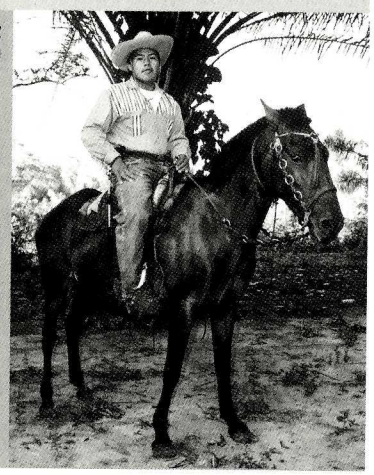
『月刊みんぱく』は基本的には民博の動きを伝える情報誌としての役目をもっているのでしょうが、それと同時に文化人類学（民族学）という学問領域について、より多くの人びとに親しんでいただくための知識雑誌という側面をも重視しているのでしょう。各月の号ごとに特集が組まれ、特集に合わせた文章がいくつも載っているのはそのためでしょう。この特集はいうまでもなく最重要記事としての位置付けを与えられており、読者ももちろん特集を楽しみにしているのは間違いないところでしょうが、それだけに毎月特集の種を探すというのは編集担当者には相当の重荷になっていると思われます。『月刊みんぱく』自体の発刊を毎月ではなく隔月にして、そのかわり頁数はもう少し増やすといった形もあり得るかと思います。現在、一頁あたりの文字数は多すぎるように思えますので、活字のポイントを少し上げ、頁あたりの文字数を減らせば全体の増量ができるでしょう。現在のところ、少ない頁数の冊子に多すぎる情報量という印象があり、全体に少々ゆったりした観があってもいいと思います。

万国津々浦々

スーツケースとアマゾンの旅

齋藤 晃
（さいとう あきら）
本館先端人類科学研究部

なぜか、わたしのリュックサックとスーツケースと一緒に記念写真を撮りたがる村人たち



馬は重要な交通手段であるほか、牛の放牧にも不可欠である

海外旅行用のスーツケースが壊れてしまった。二〇〇四年末に購入したのだから、二年もたなかったことになる。車輪のひとつがだめになり、また鍵もいかれてしまった。無理な使い方をしたつもりはなかったのに、あっけないものである。

そもそも、わたしはスーツケースがきらいだ。図体がでかく、柔軟性がなく、いかにも重そうに見える。南アメリカのフィールドにいくときは、登山用のリュックサックかスポーツバッグタイプの旅行カバンをもっていく。そんなわたしがスーツケースを購入したのは、ここ数年、欧米へ出張する機会が増えているからである。舗装された道路を歩くなら、スーツケースはじゃまにならないし、型崩れしないぶん、運びやすいともいえる。水気や汚れもはじいてくれる。とはいえ、欧米だって、どこでも舗装されているわけではない。車輪が壊れてしまったのは、ドイツの地方都市で砂利道の上を引きずり回したからだと思う。

金庫として活躍

じつをいえば、スーツケースを購入したのは初めてではない。大学院生のとき、ボリビアの首都ラパスで、有名ブランドのりっぱなスーツケースを買ったことがある。なぜそんなものを買ったかというと、調査地の村で、現金等の貴重品を収納する金庫として役立つと、大学の先輩からアドバイスを受けたからである。おかげさまで、盗難の被害にあうことはなかったが、このスーツケースの運搬には苦労させられた。

馬に投げ飛ばされ

わたしの調査地はアマゾン川上流の先住民居住区である。飛行機の定期便がある町から、船外機付カヌーで三日ほど川をさかのぼり、そこから半日ほど歩かなければならない。この地域では、雨季には川の水があふれ出し、そこらじゅう水浸しになるため、カヌーでどこでもいくことができる。しかし、乾季には平原が乾燥するため、馬での移動が欠かせない。そこで問題は、スーツケースをどうやって馬に乗せて運ぶかである。

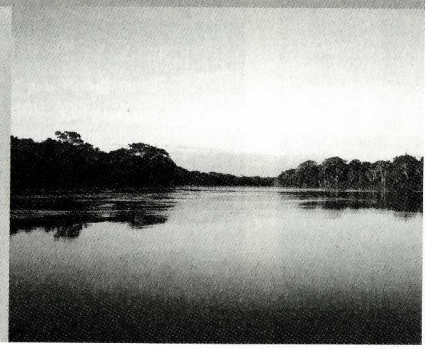
わたしの友人たちは、スーツケースの中身を半分、穀物袋に移し替え、その袋とスーツケースを紐で結んで、馬の背に乗っけるという解決策をとった。しかし、どうやらアマゾンの馬には、スーツケースの固い感触がお気に召さなかったようである。移動中、馬は暴れだし、スーツケースを地面に投げ飛ばすまで、狂ったように跳躍し続けた。

こんなことが繰り返されるので、われわれはスーツケースの中身をすべて穀物袋に移し替え、空のスーツケースも袋に入れて、馬の背にくくりつけることにした。つまり、わたしのスーツケースは、収納すべき荷物と化したわけである。とにかく、この方法により、ようやく馬はおとなしく荷物を運んでくれるようになった。

このスーツケースはその後、旅行に使うことはなかった。馬の汗の強烈な臭いが染みついて、とてもじゃないが、人中でもち歩くことができなかったからである。

三個目のスーツケースを買う予定は、今のところない。

軽飛行機の窓から見た平原の光景。乾季の終わりで、水は徐々にひいている



イシボロ川。太陽に焼かれ、雨に濡れながら、カヌーで川をさかのぼる

表紙モノ語り

350枚の表紙

池谷 和信(いけや かずのぶ)
本館民族社会研究部

『月刊みんぱく』は、一九七七年一〇月に第一号が刊行されて、今回三五一号となった。この表紙は、前号までの三五〇冊の表紙すべてを刊行順に並べた。左上にあるのが第一号で、それから右に続き、二列目へと入る。三五〇号の夜這い棒は、右下に位置している。

こうして表紙全体を見ると、本誌の三〇巻の歴史について、改めて考えさせられる。変わらないものもあれば、変わるものもあるといったところか。まず下から二列目の右半分を除いて、民博所蔵のモノが選ばれてきたことでは一貫している。ときにはアップで、ときには背景をつけて紹介し続けてきた。どういうわけか仮面や布が多く、色は茶系や赤系のモノが多いことが確認できる。

しかし、下五列目あたりから、「月刊みんぱく」のロゴが大きく変わるとともに、色使いが変わってきた。背景色を明るくしてモノをきわだたせようということで、カラフルになっている。同時に、インド映画のポスター(下から五列目)のように現代的なモノも増えてきた。そして、二〇〇四年の一年間(下から二列目)は、特集テーマに関係した日本各地の風景が紹介されている。モノが続いてきたなかで、太陽の塔がいかに衝撃的であったことか。その後、再びモノにもどっているのがわかる。

これまで編集委員会では、地域のバランスや展示会に合わせて、見どころのひとつを表紙にしてきた。表紙の変遷は、民博の展示の歴史を語っているのかもしれない。わたし自身でいえば、表紙の解説を書いた三冊に対してはとりわけ思いが深い。南アフリカの街でそのモノを収集したときのこと、改めてモノについて知らなかったと気づかされたことを思い出す。読者のなかにも、心に残る表紙がきっとあるのではないだろうか。

外国人として生きる

心で奏でるビーナス
―ウェイウェイ・ウー（巫　謝慧）―

陳 天璽（ちん てんじ）
本館先端人類科学研究部

「ジャズに二胡？」

東京のジャズクラブ、ブルース・アレイ・ジャパンで有名男性アーティスト久米大作を中心に、バカボン鈴木などによるフュージョンジャズのライブがおこなわれていた。ゲストにパーカッション奏者の斉藤ノブも加わり、ジャズに特有の男臭さが度を増すなか、スペシャルゲストとして中国人女性が紹介された。白いドレスに身を包み二胡（中国の伝統楽器）をもっての登場。「えっ？ジャズに二胡？」と首をかしげていたわたしも、いつの間にか「暗やみに咲いた一輪の白い花」の虜（とりこ）になった。彼女の奏でる音色は、ピアノ、ドラム、ギターなどに負けない力強さと情熱をもっていた。そして、曲が変わると一転して、やさしく奥深いメロディーでわたしをリラックスさせ非日常の世界へと引き込んだのだった。

ウェイウェイ・ウー。彼女は日本、そして世界で注目を浴びている二胡の奏者である。二胡は座って演奏されるのが常だが、彼女の場合、腰に特注のスタンドをはめ、そこに二胡を載せて立って演奏をする。また独自で開発したエレクトリック二胡を用いているので、ジャズやクラシックはもちろんのこと、ロックやラテンなど洋の東西を問わず幅広いコラボレーションを可能にしている。ウェイウェイ・ウーが体現する二胡の斬新さとスケールの広さは、まさに目から鱗だ。

中国上海出身。音楽一家に生まれた彼女は、幼少のころからクラシックバイオリンを学び、九歳で名門音楽学校「上海音楽学院付属小学校」に入学。一五歳のとき、クラシック曲を二胡で表現したいと思ったのが、二胡を始めるきっかけとなった。上海戯曲学校での英才教育の末、プロの音楽家として中国での生活は保障されていたが、更なる可能性を求めて一九九一年に来日した。「初めは語学学校で日本語を学びました」。才能をもち、母国では有名であっても異郷では通用しない。ゼロからのスタートだった。当然、苦労もあっただろうが、外国人として生きる際の負の面をみじんも感じさせずニッコリと言った。「もともとは一年で帰る予定でした。でも、日本に来て、レコードショップの試聴コーナーで生まれて初めていろんなジャンルの音楽を知り、自分もやってみたいと思いました」。

国境を越えたメロディー

そんな彼女の好奇心と才能を神はほうっておかなかった。一九九六年「香川事件」が起こったのだ。彼女の妹で、アジアの歌姫として知られNHK紅白歌合戦にも中国人歌手として初出場したａｍｉｎが、当時、ロックバンドグループ、爆風スランプのファンキー末吉とコラボレーションするライブコンサートを開く予定だった。しかしその前日急病となり、「代わりに出て」と助けを求めてきた。翌日ニューヨーク行きを控えていたので迷ったが、急遽キャンセルしてすぐに会場である香川に飛んだ。「ファンキーさんに、『アドリブでいいのでお願いします』と言われ、激しいロックに合わせて二胡を弾きました。クラシックをやってきたわたしにはアドリブなんて初めてだったんです。でも、やってみたらとても気持ち良くって。一週間後には、ファンキーさんたちとバンド『五星旗』を結成していました（笑）」。

バンドを組んでから、二胡が他の楽器に負けないようにするにはどうすればいいのか考えた。「すぐ東急ハンズに行って、いろんな道具を手に入れて工夫しました」。研究に研究を重ね開発したのが、今の独自のスタイルだ。二胡の新しい可能性を切り拓いた彼女は、その後いろいろなジャンルの音楽とのコラボレーションを果たし、音楽の境界を越えた作品が話題となった。二〇〇二年にはワーナーミュージック・ジャパンより「Memories of the Future」でメジャーデビューした。二〇〇三年には、プロ野球の開幕戦で「君が代」を演奏した。外国人、特に中国人として「君が代」を演奏したときの思いを聞くと、「オファーがあったとき、光栄だと思いました。中国（母国）の楽器を使って自分が暮している国の歌を、大きな球場の中心で演奏したときは誇らしい気分になり、とても気持ち良かったですよ」。二胡を奏でる彼女の心身は、自然と融合しており、すでに国境など関係ないのだ。そんな彼女が発するメロディーは、多くの人に感動を与え、日本の人びとの心に浸透している。例えば、二〇〇五年愛知万博の公式アルバムには、作曲した曲を提供し演奏もした。中国（母国）のCM曲は話題を呼び、近々大手ハウスメーカのCMにも出演する予定だ。わたしがインタビューした翌日も、長岡で震災復興チャリティーコンサートに出かけていた。

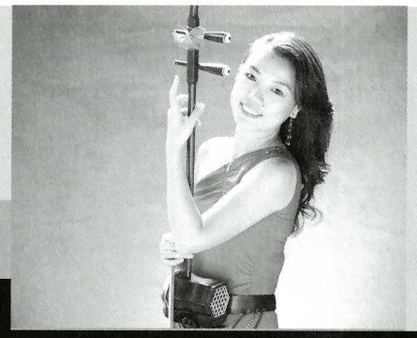
アイデンティティを伝えて

メディアなどに引っ張り凧で忙しいなか、彼女はもうひとつの顔をもつ。二胡の教室「心弦」の主宰である。来日当初、短大に通いながら「二胡を教えて」と言う友人や知り合いたちの要望に応え、自宅で個人レッスンをしていた。親切で丁寧な教え方が評判となり、口コミで生徒が増え、やがてグループレッスンができるクラスを始めることとなった。「心弦」は、今年で成立一二年を迎える。人びとの「心の弦」を弾き、感動を与えられるようにとの思いから命名したそうだ。多くの生徒を輩出し、なかには二胡の講師や奏者になった人もいる。

ウェイウェイさんに学んで三年になる学生の一人は、中国での二胡検定試験上級レベルに合格し、最近「心弦」の初心者向けクラスの講師を始めた。「銀行マンをしていましたが、一年前に仕事を辞め、今は講師をしながらアルバイトをして暮しています。中国語も学び始め、いつかは本格的な二胡の先生になりたいと思っています。二胡、そしてウェイウェイ先生に出会って、人生が変わりました」とイキイキしている。

ウェイウェイさんは言う。「すばらしい日本人の生徒に囲まれて幸せです。わたしのアイデンティティでもある二胡、そして中国の文化を紹介すると、みんな吸収し、とても尊重してくれます。外国人として日本で生きる人たちに伝えたいことがあります。ちゃんと自分のアイデンティティをもち、人に伝えることが大切だと思います。自分がしっかりしていないと、他人には何も伝わらないから」。

彼女が奏でるメロディーが人びとの心に届くのは、しっかりと自分のスタイルをもっているからなのだろう。


二胡の奏者
ウェイウェイ・ウー

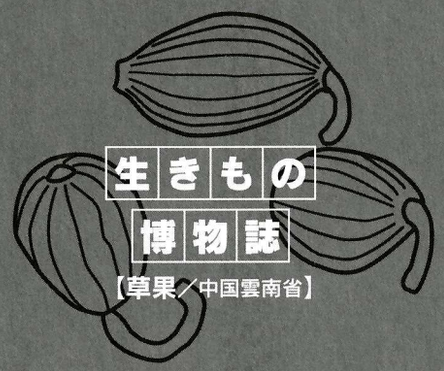
ライブステージにて

腰に二胡を載せて立って演奏

教室の生徒さんたちと。
遠方から通って来る人もいる

教室「心弦」の授業風景

ウェイウェイ・ウー　オフィシャルホームページ
http://weiwei-wuu.com



生きもの博物誌

【草果／中国雲南省】

亜熱帯林と草果（そうか）

篠原 徹
（しのはら とおる）
国立歴史民俗博物館教授

雲南の肉料理につきもの

中国雲南省の省都・昆明（こんめい）で庶民の行くレストランに入ると特有の匂いがする。嗅覚の優れた人なら中華料理になじみ深い八角茴香（ういきょう）の匂いとは違うのがわかるはずである。匂いの主は草果（ソウカ）と中国語でいう。雲南の肉料理にはつきものである。店の主人にこの草果を見せてもらった。一見してこれはショウガ科の果実であることはわかった。どこから来て、どんな植物だと聞いたら、あまりよくわかっていないのじゃないかと思ったが、「これは樹木に成るよ」といった。まさか、ショウガ科のものに樹木はないだろうと思いつつ、産地を聞くと雲南の南だという。これは雲南のカルダモンといっていい芳香である。これが雲南省がベトナムと接する山岳地帯の特産物である草果との最初の出合いであった。

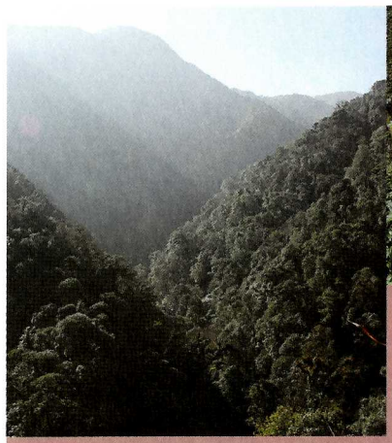
その後、わたしたちは雲南の南にある紅河ハニ族イ族自治州の金平県の者米（しゃまい）ラフ族郷の者米を拠点にして、山に住む多様な民族の自然と生活のかかわりについて調査をはじめた。者米は南北を山に挟まれた谷で、河岸段丘にはタイ族が、山腹にはハニ族、ヤオ族、イ族が生活している。現在は政府の定住化政策で山腹に降りて来たラフ族も生活している。他にも別の民族がいるが、この人びとが接触するのが六日毎に開かれるマーケットである。ここではハニの人たちが大量の草果を仲買人と取引していた。こうして栽培している近くでこの草果と再び出合った。マーケットでは各民族の得意な農産物があるので、売り手が買い手になり、買い手が売り手になるのだけれども、ヤオだけはマーケットでは買い手でしかなかった。じつはヤオは山のなかで栽培した草果を村にやって来る仲買人に売ってしまう。マーケットにはそれでえたお金だけもって物を買いに来るのである。

トラやサルのいる山奥で栽培

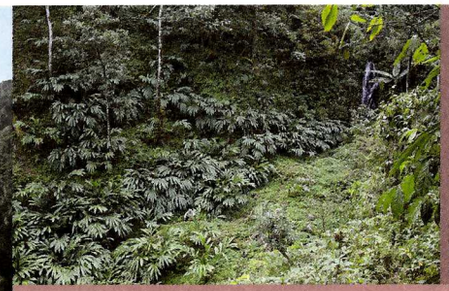
こうなればわたしたちは山のなかで栽培する草果を見に行かなければならない。いつも世話になっているヤオの村へ行き、草果の栽培地に連れて行ってほしいと頼む。これが大変な山奥であり、彼らの出作り小屋はそこにある。彼らの足で四時間くらい、わたしの足では実際一〇時間かかった亜熱帯林のなかに草果畑はあった。トラもテナガザルもまだいると言われる三〇六七メートルの西隆山の向こうはベトナムである。この一帯はブナ科を主体とする亜熱帯林でキャノピーは閉鎖に近い状態である。ヤオの人びとはこの亜熱帯林のなかで樹を間伐し、その下に草果を栽培していた。これは明らかに彼らが自然とのつきあいで考えだしたものである。ヤオの人びとは数十年単位で移動するらしい。ここに来る前は元陽あたりの山にいたと言う。そこで同じヤオから草果栽培を習ったようだ。草果はヤオの人びとは高度が一五〇〇メートル以上でないと実ができないと言っていた。

わたしは樹林の下の草果の花が咲いているとき、花を観察していた。するとマルハナバチの仲間がやって来て、花に潜って行った。そのとき、草果はある種のマルハナバチが受粉に特異的にかかわっているのではないかと思った。そしてある種のマルハナバチが一五〇〇メートル以上にしか分布しない種なのではないかと想像している。高い亜熱帯林でしか栽培できないのであろう。だから山歩きの得意なヤオの特産物になっている。

帰ってから、たまたま調べていた済州島近くで、台風に遭い沈没した有名な新安沈没船の植物遺体のなかにこの草果の実があることを知った。一三二三年、この船は寧波を出て博多に向かっていて遭難し、沈没した。かつて日本にも香辛料として入っていたのかもしれない。そうだとすると沈没船の草果は雲南からはるばる日本にも来ていたことになる。雲南の山々と沈没船の不思議な交錯を想像すると楽しい。



村から遠く離れたベトナム国境近い亜熱帯林



亜熱帯林の辺縁に栽培されている草果

ヤオ族の人びとと田植え前の棚田

出作り小屋と奥にある草果を乾燥させる窯

マーケットで売られている草果の花芽（食用）

乾燥されて取引される草果の実

草果（学名：*Amomum tsao-ko*）

ショウガ科のアモムム属は東アジアからマレーシアなどの熱帯、亜熱帯に分布し、８０～１００種ほどが知られている。ショウガに似たものが多い多年生草本である。この属には実がインド・カルダモンやジャバ・カルダモンなど香辛料や薬用として使われるものがある。草果の実は乾燥して肉料理の香辛料として使われる。花芽はサラダなどの生食としてもおいしい。

掘り出された ニカラグア内戦の傷

長谷川 悦夫（はせがわ えつお）
法政大学非常勤講師

日本人が盗掘している?!

一〇年近く前、わたしは中米ニカラグアの内陸部で先スペイン期の遺跡群を調査していた。人口五万人の町の周囲に牧草地が広がり、マウンド遺跡が点在していた。我々はジープで山野を走っては遺跡を見つけ、地図上に位置を落とし、写真撮影と測量をおこなった。調査チームは四人。わたしをリーダーとして、学生が二人、そして町の博物館の館長の息子である。

ある日、調査を終えて町に戻ると、博物館の館長が慌てていた。「日本人が盗掘をしているというニュースが流れた。反論の会見を用意しておいたからすぐに来い」。わたしは訳もわからずに地元テレビに出演して、「盗掘をしているのではない」と釈明した。

噂の出所は、遺跡のある土地の所有者だった。近隣住民の話では、近くに住む老人が土地所有者とのことだった。我々は老人の許可をえて遺跡に立ち入った。実際は、法律上の土地所有者は老人の息子で、彼が我々を「私有地への侵入と盗掘」で告発していた。わたしは医師である土地所有者を訪ね、彼の父親を所有者と思い許可をえたこと、一センチメートルたりとも発掘はしておらず、測量をおこなっただけであることを説明し、文化庁の調査許可証も提示した。

それから二日後、今度は全国紙の一面に「日本人盗掘者」の記事が出た。また、外国人の「盗掘」を許しているとしてニカラグア文化庁も批判されていた。我々は調査を中止した。

事ここに至って、この騒ぎが単なる誤解によるものではないことがわかってきた。最初の問題は、わたしの協力者となってくれた博物館の館長の家族に内戦時（一九八〇年代）の反革命軍の重要人物がいたことだ。社会主義政党（旧革命政権）の支持者たちが、わたしを敵とみなした。わたしは政治にかかわるつもりは無かったし、行動をともにしていた館長の息子は、内戦時はまだ子どもだった。彼は「俺の一家を目の敵にしてる、政治的な策謀だ」と憤慨していた。

第二の問題は、文化庁が発行した調査許可証の文面であった。これには、わたしが調査地とした県の全域で「発掘をおこなうことができる」となっている。本来は「踏査（prospeccion）」と書くべきところ、「発掘（excavacion）」としていた。語句の間違いには気づいていたが、あえて指摘しなかった。失敗だった。「発掘」ということばは、現地の人びとにとって深刻な意味をもつ。遺跡を発掘しても、出てくるのは土器片や石器だけだ。しかし「発掘」ということばは金の採掘を連想させ、外国人による富の収奪という思い込みに直結してしまう。

第三の問題は、中央政府と地方自治体の対立である。わたしは、調査地に来てすぐに市長にあいさつをするべきだった。博物館の館長に、市長への表敬訪問を設定してくれと頼んではいた。しかし延び延びになっていたのだ。現地ではすでに雨季が迫り、我々は雨が降る前に調査を進めておこうと時間を惜しんだ。これが仇となった。市長にとっては、文化庁からの許可を振りかざした傲慢（ごうまん）な外国人が、自分の市で勝手なことをしていると思えたのだ。

微妙なバランスの上に平穏

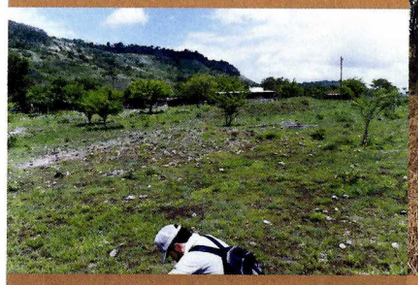
数日後、市長と市の評議員、わたしのあいだで話し合いがもたれた。我々の支援者の説得も功を奏して、前日には市長も態度を軟化させていた。ところが、話し合い当日の新聞に、市長が何日か前に書いた「外国人の盗掘を許さず、文化財を守る」という趣旨の「勇ましい」投稿が掲載されてしまった。引っ込みがつかなくなった市長は再び態度を硬化させた。

首都の国立博物館の考古学者は、わたしの飲み友達だった。彼自身は社会主義政党の支持者だったが、文化庁長官に「今回の件でハセガワには落ち度は無く、市長らの政治的抗争の手段に利用されただけだ」と意見書を書いてくれた。結果、彼は訓告処分を受けた。

調査地でも我々を警戒する人ばかりではなかった。高校生たちがやって来て、データの整理を手伝ってくれた。生徒会長はラジオで我々を擁護する発言をしてくれた。町の博物館の館長が主催する文化サークルにも呼ばれて激励された。我々を非難する記事を書いた新聞記者とも、最初こそ敵対的だったが、道で立ち話などするうちに打ち解けてきた。彼自身、余りにも扇情（せんじょう）的な記事を書いたことを自覚していた。仕事柄、遠い国から来た我々に興味をもち、情報も欲しがっていた。

やがて雨季が始まり、結局は調査を再開できずに帰国することになった。空港に来てくれた考古学者が言った。「国民が憎み合っているのは悲しい。内戦が人びとを引き裂いた。友人も家族も」。わたしは町の博物館の館長の協力を仰いだことで、地元の理解をえたつもりでいたが、軽率だった。人口五〇〇万の国がふたつに割れて殺し合い、一〇万もの死者を出した過去の傷は深い。人びとの内なる敵愾心（てきがいしん）は日常生活では表に出ない。しかし、微妙なバランスの上に平穏があり、外からやって来た外国人がどちらかの側につくと、バランスは崩れて争いが表面化する。埋蔵文化財という人びとの心の琴線に触れる問題が絡むと、さらにやっかいなことになるのだった。

牧草地に点在するマウンド遺跡。石を積み上げて造った建築物が崩れたもので、まだほとんど調査されないまま手付かずである



町の博物館に集められた石彫

植民地時代以来、地元の収集家によって遺跡から持ち去られ、石彫（せきちょう）の基部だけが残されている

内戦後1990年代から増えた開発工事で壊された遺跡。予算と人手不足のため調査されないまま消えていく遺跡も多い

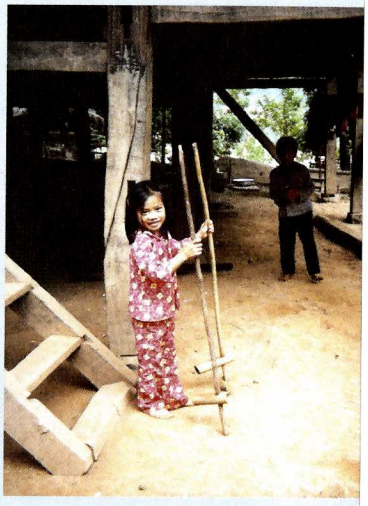
世界のおくりもの
こどもとおとなをつなぐもの

会期：2006年10月12日（木）～
2007年3月21日（水・祝）

場所：常設展示場内

みんぱくには、日本や世界のさまざまな地域における子どもと大人とのつながりを感じさせてくれる資料がたくさんあります。今回の企画展では、「子どもを護る」、「子どもの成長を願う日本人の想い」、「信仰・いのり」、「装い」、「学びと遊び」、「思いを託す」、「大人への入り口」といったテーマに合わせたエピソードとともにそれらの資料のいくつかをご紹介します。また、2006年の3～5月に開催された特別展「みんぱくキッズワールド」に訪れた子どもたちのいきいきとした様子を併設の写真展でご紹介します。

お七夜用壺・エジプト



竹馬で遊ぶ少女・ベトナム
（撮影／樫永真佐夫）

編集後記

今回は『月刊みんぱく』が30巻を終えたことを記念して、その特集号を組むことになった。巻頭では、初代編集長の石毛先生、最長期間編集長をつとめた野村先生、そして現在編集長として奮闘中の池谷先生による座談会となった。誌面にはあらわれなかった過去の苦労話や企てが興味深く語られている。それにつづき、歴代の編集長が在任当時の思い出を、短いがそれぞれ印象深いエッセイでとりまとめてくれた。わたしは開館4年目に民博に着任し、すでに古参のひとりになってしまったが、これらをよむと、いつもかわらぬ民博の顔として鎮座してきた『月刊みんぱく』も折々変化してきたことが思い出される。また今号の表紙には、全号の『月刊みんぱく』の表紙を掲載した。そこからは民博の約30年の凝縮された歴史も走馬灯のようによみがえってくる。

ところで「まぐわう」をテーマにとりあげた前号の特集にいくつか意見がよせられている。学術的立場とはいえ、『月刊みんぱく』で、性の問題に踏み込んだことに対してであるが、編集部としては当然慎重な議論を重ねた結果であった。いずれにせよ、今後の『月刊みんぱく』の方向性を考える上では重要な契機となった。読者のご意見をおまちします。（庄司博史）

月刊みんぱく

次号予告／1月号特集
イノシシとブタ

2006年12月号　第30巻第12号通巻第351号
2006年12月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511　大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話06-6876-2151

発行人　朝倉敏夫

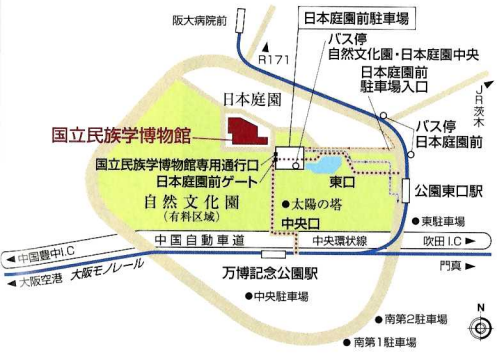
編集委員　池谷和信（編集長）　樫永真佐夫
川口幸也　庄司博史　山中由里子

協力　財団法人 千里文化財団

制作　株式会社博報堂
有限会社ブックポケット

製版・印刷　アサヒ精版印刷株式会社
株式会社NPCコーポレーション

●本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館企画連携係へ
●本誌掲載記事の無断転載を禁じます



交通案内

■大阪・千里万博記念公園内　●大阪モノレールで「公園東口駅」・「万博記念公園駅」下車徒歩約15分。●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車徒歩約15分（茨木方面から1時間1本程度、日本庭園前駐車場乗り入れのバスがあります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください）。●自家用車の場合は、万博記念公園「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。